

自己調整学習傾向と自己学習シミュレーション教材の利用の関係性

八木街子^{1,2)}、佐々木彩加^{1,2)}、村松真吾^{1,2)}、浅田義和³⁾、村上礼子^{1,2)}

- 1) 自治医科大学看護師特定行為研修センター
- 2) 自治医科大学看護学部
- 3) 自治医科大学医学教育センター

テクノロジーの進歩により、学習者に提供可能な自己学習教材は増加した。その一方で、その利用状況と成果に関する分析は十分に実施されていない。本研究では、聴診トレーニングシステムの利用状況と学習者の自己調整学習傾向を分析し、効果的な自己学習シミュレーション教材の利用支援の方法を探索する。

本研究の対象はA施設で看護師特定行為研修を受講する58名の看護師とした。学習者には、研修受講中に利用可能な学習教材として iPax (株式会社テレメディカ) を提示し、オンライン上で聴診の練習ができるようにした。調査項目は、年齢、実務年数、最終学歴、認定資格の有無、過去のeラーニング経験、自己調整方略尺度(石川・向後 2017, 5 因子 23 項目)、試験成績(総和)、iPax 全利用回数ならびに正解率(全利用回数、初回、最終実施回)とし、項目間のスピアマンの順位相関係数を SPSS Statistics 27 にて分析した。本研究は自治医科大学倫理委員会の承認を得て実施した(臨大 16-091)。

分析の結果、iPax 全利用回数と正答率(最終実施回)に相関があり($\rho = .453$, $p = .001$)、正解率(全利用回数)は、正解率(初回)($\rho = .441$, $p = .001$)、自己調整方略尺度「II. 学習を工夫する」($\rho = .336$, $p = .013$)とそれに関する下位項目3項目、試験成績($\rho = .336$, $p = .013$)と相関があった。正解率(最終実施回)も、自己調整方略尺度「II. 学習を工夫する」($\rho = .279$, $p = .045$)とそれに関する下位項目2項目と相関があった。

本研究の結果から、学習者は正解率が上がるまで繰り返し学習する傾向があり、「学習を工夫する」、つまり、認知的方略を選択する傾向の高い学習者の正解率が高かった。先行研究では、認知的方略を高めるために精緻化を促進するサンプルの提示や習慣化を促すことや内的調整のためのルーブリックの活用効果が論じられており、今後の自己学習シミュレーション教材の利用促進のための支援方法として利用可能であることが示唆された。